



Title	対話は終わらない
Author(s)	本間, 直樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 4-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4354
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対話は終わらない

本間直樹

どうやら毎年7月の終わりには、ヨーロッパを訪れ、「哲学プラクティス」や「ソクラティックダイアログ」といった「対話」関連の国際会議に顔を出すというのが、年間スケジュールとなってしまう。社会の具体的な場所で・生きる人たちとともに哲学を実践することを主旨とする「哲学プラクティス」は、私たちの臨床哲学の試みと共通点が多く、今回こそ臨床哲学について発表しようと思いつきながら、準備が間に合わなかったのが何より残念だ。今年の臨床哲学関係の参加者は前回に引き続き寺田俊郎さんと私、そして今回初めての会澤久仁子さんと栗田隆子さん。

この会議への参加は、1998年ドイツ、ベルギッシュグラートバッハで開かれた第4回会議「哲学プラクティスと徳」以来、今年で3回目になる。当時私には哲学プラクティスについての予備知識がほとんどなかったうえ、“創始者”アーヘンバッハがその“お膝元”でどうしてもやりたかったというそのテーマがその当時の（そして今も？）私にとってまったくピンとこなかったこと、それに初めてのヨーロッパ体験、英独仏語の混交という条件が重なって、情けないことに私には

参加すること自体がストレスだった。（この会議の様様については、中岡成文「哲学プラクティス国際学会に参加して」『臨床哲学』創刊号1999年を参照。）

しかし1999年、オクスフォード大学で開かれた第5回会議は随分違ったものだった。テーマが“対話を通して考えること Thinking Through Dialogue ”であり、会議全体の主旨が明確に「対話」に方向付けられ、言語も英語に統一されており、またプログラムと会場が「哲学カウンセリング」、「子どものための / とともにする哲学」、「ソクラティック・ダイアログ」の3つに区分けされていたことなど、大変参加しやすかった。また内容面でも、主催者カリン・ムリス Karin Murriss の「子どものための / とともにする哲学」、ビジネスのための哲学(ディレンマ・トレーニングやソクラティック・ダイアログを含む)など、短期精神療法ブリーフセラピーと哲学カウンセリングの比較など、より実践的なテーマが多く、哲学にとって「臨床」とは何かを考えている私たちにとって、馴染みやすいものであった。いずれにせよ開催者・開催地によって内容そして参加者にかなりのヴァリエーションがあることは興味深い。このオクス

フォードでも、イギリスやオランダの参加者が多かったことが内容面にも反映されていたのかもしれない。(詳しくは『メチエ』第4号特集：哲学プラクティス参照)

次回開催地決定をめぐる顛末

さて、21世紀最初の開催地オスロ。気候は暑くもなく、寒くもなく、まさにベストコンディション。今回から会議は2年おきに開催されることになった。主催者は「オスロ・グループ」と呼ばれる人たちで、開催スタッフは十数人で決して多くない。3年前ドイツで知り合ったとき、彼ら/彼女らはプラクティスを準備している段階であったが、その後アーヘンバッハに敬意を払いつつも、オランダ経由でソクラティック・ダイアログを取り入れるなど、独自の方法論を展開し、着実に歩みを進めているようだ。なお、開催スタッフのなかには、ノルウェー出身で、現在ドイツの哲学プラクティス協会の委員でもあり、哲学プラクティス国際協会の副会長を務めるアンダース・リンドセット Anders Lindsethの姿も見られた。

会議は7月24日から27日までの4日間、オスロ郊外にあるオスロ大学教育学部の校舎にて行われた。全員が一堂に会して聴く講演が5、いくつかの部屋に分かれ同時に行われるペーパープレゼンテーション(用意した原稿を読み上げ、質疑応答を行うもの)が33、その他ワークショップなどが11。参加者は100名足らずだったが、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランドの北欧か

らの参加者が多く、その他、オランダ、アメリカ合衆国、ドイツ、スイス、イギリス、イスラエル、フランス、ベルギー、ルワンダ、カナダ、ブラジル、トルコ、日本と、哲学プラクティスは各地域に着実に拡がり始めているようだ。

ところで、毎回、会議期間中に次回の開催地を決めることになっている。大変驚いたことに、会議参加者のうちにヨーロッパ以外(つまり日本で)で会議を開いてはどうかと強く主張する人たちがいて、オスログループの一人ピア・アクセル Pia Axell の自宅で開かれたレセプションで、今回の主催者ヘニング・ヘレスタッド Henning Herrestad が私に非公式にそのことを打診してきたときには戸惑ってしまった。

ソクラティック・ダイアログについては、オクスフォードでそれを体験してからすぐさま日本でも何度か試行し、いまや臨床哲学の活動にとって欠かせぬ一駒となっている。だが哲学プラクティスの柱である“カウンセリング”の方は、私たちもまだ二の足を踏んでいるのが実状だ。しかも欧米のプラクティショナーたちは大学の外で活動(開業“in practice”)しているのに対し、私たちは(まだ?)大学の中のなかにいる。いずれにせよ、哲学プラクティス(というより哲学カウンセリング)に本格的に取り組むかどうか決めあぐねている私たちにとって規模が大きくないとはいえ国際会議を大阪で開くのはどうも荷が重い。

しかし彼ら/彼女らが私たちに期待するのは分からないわけではない。日本で会議を開くことを勧めた人たちの言葉には、ヨーロッパの哲学の伝統やセラピー

文化に限界を感じ、何か違ったものをその「外」いわゆる「東洋思想」に求めるといふオリエンタリズムの臭いも確かにあった。しかしそれだけではない。哲学プラクティスはまだまだ“アカデミズム”では認知されておらず、主催者のオスログループを含めて会議の参加者の多くが、大学の中に職を持っていない。国際協会からの財政的サポートも恐らくそう多くは期待できないなか、会議の主催者は毎回、大学の共催を得るのに苦労しているのだろう。そうした状況で、哲学プラクティスに関心を持って会議に3度も(!)参加し、しかも「臨床哲学」という名を冠した研究室を国立大学の哲学講座のなかにもつ私たちに、彼ら/彼女らの視線が集まるのも無理はないかもしれない。また、先ほど「オリエンタリズム」と書いたものの、アジアに位置し、アジア思想の一脈を担い、かつ紛れもなくアジア文化・風土のなかにある日本で、しかも“社会へ出ていこう”と言っている私たちが、“ソクラティック・ダイアログ”だの“哲学カフェ”だの、相変わらずヨーロッパの流行りものをいち早く取り入れようとしているのも、おかしい話なのかもしれない。

あれこれ考えているうちに会議は終わり、結局次回の開催地はイタリア、ミラノに決まって私は胸をなで下ろした。会期中、アーヘンバッハの指導のもとでドイツのベルリンとイタリアのミラノに哲学プラクティスの研究所が作られることを耳にしたが、イタリアでそれほど哲学プラクティスが受け容れているとは知らなかった。

アーヘンバッハの遅刻

さて、肝心の会議の内容について。前回と同様に、テーマはほぼ「哲学カウンセリング」、「子どものための/とともにする哲学」、「ソクラティック・ダイアログ」の3本柱に分けることができる。そのうち、ソクラティック・ダイアログについては、昨年ドイツで開かれた国際会議に参加したおかげで、随分と明確なヴィジョンをもつことができたこともあり(『メチエ』7号特集:ソクラティック・ダイアログ参照)、私は主にカウンセリング関係の発表に参加した。そのなかから私の印象に残ったいくつかの講演や発表を簡単に報告しよう。

まず会議の冒頭を飾る「オープニング講演」。もともとのプログラムによれば、国際協会会長のアーヘンバッハがこの大役を務めるはずだったが、こともあろうに彼が“遅刻する”(^_^;)という不始末をしでかしたため、急遽会議最終日にトリの講演をするはずであったリンドセットが代役を務めることになった。リンドセットの講演タイトルは“Philosophical Practice: What is at stake?”。講演の要点は、哲学プラクティスをそれ以外のプラクティス(カウンセリング)から際立たせるものは何か?と問いかけ、その答えをめぐってコロキウム(討論会)を開こうというものだった。哲学プラクティス(カウンセリング)が様々な地域で様々な問題や人々に受け容れている反面、何が哲学的といえるのかについて、プラクティショナーたちのあいだで答えが共有されることがまれになったと彼は言う。しかしリンドセットは自分自

身の答えを明確に言うことを避けた。なぜなら彼はこれまでの会議で何度も実存哲学や解釈学から哲学プラクティスを基礎づける試みを発表していたからだ(詳しくは本間直樹「他者の自己表出を受けとめながら…」『臨床哲学』第2号2000年を参照)。けれども彼は答えのヒントとなる事柄をいくつか言った。彼によれば哲学プラクティスは「応用哲学 applied philosophy」にあたるという。応用というのは、なんらかの問いや問題に対して解決・解答あるいは助言を与えることであるが、その問いや問題それ自体が哲学的である必要はない。むしろ肝心なのは、哲学的な仕方である in philosophical way 答えることである。その際、必要なのは柔軟さ、偶然の出来事にうまく対応することである、と。講演の後に会場からの、あなたの言う哲学的な仕方とは具体的にはどういうことか?という質問に対し、リンドセットは、例えばカウンセリングの場面では、「あなたの問題は何ですか」と尋ねるのではなく、他者の生の語調 tone から対話への要求を聴き取ることが大切なのだと答えた。

「応用哲学」に向こうを張って「臨床哲学」を提唱する私たちにとって、「応用」を肯定的に語るリンドセットの言葉は驚きだった。しかしよく考えてみれば、ガーダマーの解釈学をベースとするリンドセットが、解釈の実践が具体的状況への適用においてなされると主張することは何の不思議もないことだ。それよりも、まさに臨床哲学研究室の(ケアや教育その他についての)日々の議論のなかでも「柔軟さと偶然性への対応」ということが重要な意味をもっているというこ

とを改めて気づかされた。

その後、昼食時間に私はリンドセットと話す機会があった。私は彼の講演のいくつか(彼は解釈学とナラティブセラピーに言及している)を日本語に翻訳したいと告げ、彼は喜んで許可してくれた。余談になるが、彼が「今回はプロフェッサー中岡は来ていないのか」と尋ね、「彼のドイツ語は恐るべきものだ。私などはというていかなわぬ」と言っていたのが可笑しかった。また私はリンドセットと話す前に、オクスフォードの会議で知り合ったトルコのプラクティショナー、ハルーン Harun Resit Sungurlu* と話していたのだが、彼に、「哲学カウンセリングをどうやっていいのかわからない」と言ったところ、「やってみせるから、何かおまえの生活のなかの問題を言ってみろ」と彼に言われ、私はすぐさま答えられず困惑した。後でそのことを



オスロの国立劇場

リンドセットに話し、先のリンドセットの質疑応答が大変興味深かったと彼に言う。彼は苦笑していた。(* 会議では皆ファーストネームで呼び合うので、ファミリーネームの発音がよく分からない。)

哲学と精神療法

哲学プラクティス(カウンセリング)は、精神療法(psychotherapy)としばしば対比される。方法的、政治的など様々な理由から哲学プラクティショナーは精神療法を敵視する傾向にあるが、中でもエミー・ヴァン・ダーゼン Emmy van Deurzen はイギリスの精神療法界の中心人物の一人でありながら、哲学プラクティショナーからも尊敬されている存在だ。彼女は二日目の講演で、哲学からの深い影響を受けた精神療法として実存精神療法をあげ、キルケゴール、ニーチェ、ハイデガー、ビンズワンガー、ブランケンブルクらのテキストを巧みに引用しながら、「人間理解」のために哲学と精神療法がともに手を取り合う道を示した。哲学者の言葉を次々と画面に映し出しつつ、実存精神療法の理論を手際よく体系的にまとめる彼女のプレゼンテーションは実に見事なもので、多くの聴衆は魅了されたようだ。しかし(カウンセリングの実際はともかく少なくとも理論的には)「人間」「精神」「専門性」ということさえも問い返すナラティブ・セラピーの実践や、言葉と精神の関係を「人間」の裏側まで遡行して考え抜くフロイト・ラカンの精神分析の方にむしろ関心がある私にとって、彼女のテキストの扱い方や理論的枠組みについては納得しか

ねる部分もあった。だがそれよりも、哲学プラクティスが、アメリカナイズされた心理学や精神療法を批判する一方で、実存哲学との関係が深いことをあらためて思い知らされた。エミーのような試みは哲学と精神医学との融合を試みる木村敏の仕事(彼は恐らく日本で始めて「臨床哲学」という言葉を使った人だ)を思い起こさせる。

聴くことの技術——コーチング

さて、哲学プラクティス(カウンセリング)の具体的なやり方を知りたいと思っていた私にとって、もっとも明確なヒントを与えてくれたのは、イーダ・ヨングスマ Ida Jongma のワークショップ“ The application of Socratic tools in a counselling session ”だった。オランダ出身の彼女は、アーヘンバツハのように明確な方法をもたないプラクティスから距離をとり(彼女はドイツのグループは「秘教的」だと揶揄していた)、むしろソクラティック・ダイアログの明確な方法論を支持し、それをカウンセリングに取り入れ、「コーチング」という手法を編み出した。「コーチング」は極めてシンプルなもので、3名で1つのグループを作り、それぞれが「クライアント(相談者)」、「コーチ(助言者)」、「観察者」のロールプレイをする。私もワークショップで実際にこの方法を試してみることになった。「何か悩みはありませんか」ときかれて相変わらず答えられなかった私はコーチ役をするハメになる。コーチの役割は、とにかくクライアントの話を丁寧に聴き、問題点を定式化し、助言を与え

ることである。私はすでにソクラテック・ダイアローグを何度も経験しているので、こうした役割は十分頭に入っているつもりであったが、やはり実際にやってみるのは難しい。言葉が十分使いこなせないうえ、すでに「プロ」として活動している二人を前に緊張するあまり、私は相手の話を十分聴かないうちにどうしても自分の意見を言ってしまう、後から観察者役の人に「よい聴き手ではない」とこっぴどく批評されてしまった。コーチングの要は、ソクラテック・ダイアローグの場合と同じく、話し手に十分話させ、適切な質問を行い、話し手の言葉から自然に問題点が浮かび上がるように対話を導くことである。実はナラティブ・セラピーでも同様のことがよく言われる。「聴く」ことは、心構えでも理屈でもなく、十分に磨かれた技術を必要とする。こうしたコーチングにインパクトを受けた私は、帰国後大阪大学での「対話技法論」の授業で早速これを試行し、コーチングが1対1のカウンセリングにも、ソクラテック・ダイアローグのファシリテータのトレーニングにも使える有効な方法であることを確信した。

哲学の家庭教師

会議最後の日、「円卓討論会」と名づけられたセッションの一つでは、「プラクティスで何の哲学を？」という興味深いテーマについて議論が交わされた。哲学とプラクティスへの参加者それぞれの思いが込められた議論は、臨床哲学が生まれたばかりの頃の授業の模様を彷彿とさせた。様々な意見が出されたが、やはり

参加者の多くは、哲学プラクティスが特定の知識、権威、伝統、専門性によりかかることに懸念を示した。最後の最後まで最初の問いに明確な答えが出ないままだったが、なかでも興味深かったのは、ドイツの会議で知り合ったリディア・アミール Lydia Amir の答えだった。スピノザを研究し、イスラエルの大学で哲学を教えながらプラクティスをしている彼女は、哲学プラクティスもいわば哲学の家庭教師として、哲学の専門知識を教えていいのだ、と主張した。彼女の答えには誰もうまく反応できなかったし、彼女も単に思いつきを言っただけかもしれない。しかしリンドセットの講演と合わせて後で考えてみると、なかなか含蓄のある答えだったかもしれない。大学の授業で学生を相手に教える場合は、自分の専門研究を深めたり、あるいは学生が研究者になるために必要な教養や技術として哲学(史)の知識を身につけさせることが目的であることが多い。しかし、必ずしも哲学研究者になるわけではない人を相手に家庭教師としてその人に必要な哲学を教える場合はどうであろうか？ 哲学の知識を教えるにしても、問題は何を教えるのかだけではなく、相手のニードを臨機応変に見極め、それに相応しいスピード、リズムで応えていかねばならない。まさにそこにリンドセットの言うような「哲学的な仕方」が問われるのかもしれない。実はこのことは、子どものための哲学など、哲学(史)の知識を身につけることが当たり前ではない、アカデミズムの外で行われる哲学教育に通底する問題だと今になって気がついた。なぜなら臨床哲学に集う人たちの多くは、ア

カデミズムの哲学ではなく、彼女ら／彼らのニードに応じた哲学を求めているのだから。

フレキシブルな哲学？

最後に。今回の会議で得た最大の成果はやはりイーダの「コーチング」であろう。面白いことに、哲学カウンセリングにしても、ソクラティック・ダイアログにしても、ひとたび国境をまたぐとイーダやヨス・ケッセルスなどの人たちの手によって、ネルゾンであれアーヘンバッハであれ伝統の重みがそぎ落とされ、誰にとっても分かりやすいしかし明確に効果のある方法として生まれ変わる。当然こうした方法化・道具化に懸念を示す人たちも少なくないだろう。しかしそうした批判はいつでもできる。大切なことはこうした方法の実践一つ一つの中から見えてくるものを見失わないことだと私は思う。コーチングにせよ、ソクラティック・ダイアログにせよ、方法と呼ばれるものは極めてシンプルであるが、それを通して語り出される言葉は非常に豊かである。私自身いわゆるカウンセリングというものに懐疑的であった。しかし相手が単数であるか複数であるかによって若干のやり方に違いがあるだけで、対話を営むこと自体には変わりがないのかもしれない。(もとより「カウンセリング」は“セラピー”ではなく、「相談」というほどの意味だ。日本では「カウンセリング」という言葉があまりに臨床心理に独占されているがゆえに、「哲学カウンセリング」という言葉が異様に聞こえるのかもしれない。) 欧米のプラクティショナーたち

にとってみれば、1対1のカウンセリングは哲学カフェ／ディナーや子どものための哲学、ソクラティック・ダイアログやビジネス・コンサルティングに並ぶ選択肢の一つに過ぎないようだ。そこでの共通のメディアは言葉であり、言葉を交わすスタイルは対話なのである。哲学する者は時には内省的であらねばならないが、対話は内省的であるだけではうまくいかない。対話のなかで哲学はリフレクシヴだけではなくて、十分にフレキシブルでもなくてはならない。

(ほんまなおき)

ヴァイキングの船(オスロ湾)